

論文審査の結果の要旨

氏名 田辺 勝美

ガンダーラ美術の研究は、従来、仏像自体の様式や、仏伝浮彫の表現形式、あるいはそのモチーフなどについて、ギリシャ・ローマ美術の影響を考察するという形で行われてきた。また、仏伝図像に関しては、仏教經典と照合することにより、場面の解釈がなされてきた。それに対して、田辺勝美氏の論文『毘沙門天像の起源—ガンダーラにおける東西文化の交流』は、仏伝浮彫などの細部の図像を取り上げ、その祖型をクシャン貨幣に表されるイラン系神像に見出すとともに、ギリシャ・ローマの図像にも遡ることを明らかにしており、これまでほとんど行われてこなかった新たな視点による図像学的研究をなす。

氏は、先行研究に逐一当たって鋭い批判を加え、自説の方向性を打ち出しつつ、ガンダーラの「出家踰城図」浮彫中のシッダールタ太子の前に立つ人物について、魔王マーラとする通説や、帝釈天とする異説を否定し、文献的根拠と図像的検討とを踏まえて、毘沙門天とする。その上で、この人物の図像をタイプ分けし、そのうち、弓矢をもち、鳥翼冠をつけ、武装する姿のそれを東アジアで通行する毘沙門天像の起源とし、従来、ホータンとされてきた武装毘沙門天像の起源が、ガンダーラにまで遡ることを示すとともに、クシャン朝の貨幣に表されるファッロー神の図像を基礎として、ギリシャ・ローマのヘルメース・メルクリウス神の図像と信仰とを吸収しつつ成立したものであることを明らかにする。

さらに、ガンダーラの「出家踰城図」などには、光と闇の造形化がなされていると主張する。すなわち、そこには、ギリシャ・ローマの夜の女神ニュクスが、ヴェールを持つ女神像として表される一方、馬に乗る太子が正面観で形づくられている点にギリシャの太陽神ヘーリオス的性格が認められることなどを指摘し、太子の出家が夜なされたにもかかわらず、光り輝いたという『ブッダチャリタ』『マハーヴァストゥ』などの經典の内容に即した悟りの光明世界を表象すると読み解く。

その研究は、以上のように、ガンダーラ美術に関わる図像解釈を推進しつつ、クシャン族がガンダーラ美術においてイラン系の神々の図像とギリシャ・ローマの神々のそれとを融合させる大きな寄与をなしたとする見解を始めて提出する点で、高く評価できる。

とはいって、「出家踰城図」の毘沙門天がもつ弓矢をインドの太陽神スールヤの脇侍の持物と関係づける点は、疑問である。それでは毘沙門天の図像の成立にインドの影響を認めることになり、イラン系のファッロー神に祖型を求める立場と矛盾するからである。また、ガンダーラ美術におけるクシャン族の寄与が具体的にどのようなものであったのか。工房やパトロンに関する観点や考察を欠くなど、問題点もままあるものの、本論文は、その点を考慮に入れても、新たな視点と新たな知見とを含む卓越した業績であると認められる。

審査委員会は、以上の点から、本論文が博士（文学）にふさわしいものと思量する。